

被爆・戦後80年 記憶をつなぐ

1945年8月6日に広島、9日には長崎に原子爆弾が投下され時間が残り少ない今、4歳で被爆した西本多美子さんに「一人の力は小さくない」の言葉から、核兵器のない平和な

ました。被爆者の平均年齢は86歳を超え、証言を直接聞ける話を伺います。西本さんがノーベル平和賞授賞式で感じた未来のために私たちが今できることを考えてみましょう。

西本さんが見たオスロ

昨年、日本原水爆被害者団体協議会(被団協)がノーベル平和賞を受賞しました。原爆の被害を受け、世界から核兵器をなくしたいという強い思いで活動してきたことが世界に認められた歴史的な出来事です。生協はヒバクシャ国際署名などに被団協と共に取り組んできました。2024年12月10日、ノルウェーのオスロでの授賞式に向かう一行の中に、石川県原爆被災者友の会として活動してきた西本多美子さんの姿がありました。



西本 多美子さん

石川県原爆被災者友の会元会長。金沢市在住。4歳の時に広島市で被爆。34歳の時に石川県へ。原爆被災者友の会に参加し、県内の被爆者が原爆症の認定を受けられるよう活動するとともに、自身の被爆体験を語る活動を行ってきました。

若い議員が真剣に耳を傾けた



西本さんは授賞式に先立ち国会議事堂の大会議室で被爆証言を行いました。若い議員たちが身を乗り出して真剣に聞いている姿を見て、このような話を直接聞くのは初めてなんだろうと感じ、生の言葉で伝えることができ良かったと思いました。

世界の人たちはこんなにも関心があるんだ!

ツアー参加者や現地の市民など1,000人以上がたいまつを手に平和を願う行進がありました。オープニングセレモニーでは、被爆証言会に参加していた議員が西本さんの話を引用して紹介し、「ノルウェーも核兵器禁止条約にサインしよう!」と強く訴えていました。翌朝にはその話がSNSで瞬く間に広がり、西本さんのもとには講演依頼がたくさん舞い込みました。「世界の人たちはこんなにも関心があるんだ!」と、西本さんはその拡散していく力に驚きました。

これまでの苦勞がむくわれた!

授賞式を公立図書館でのパブリックビューイングを通して見守りました。感極まって涙を流す人もいましたが、西本さんは心から喜ぶことができませんでした。賞を受け取るはずのこれまで一緒に活動してきた仲間はずでに他界し、その場にいなかったからです。



しかし、その後ノーベル平和センターを訪れた際、状況は変わりました。受賞記念特別展示として広島と長崎に原爆が投下された様子や、これまでの被団協の歩みが展示されていました。そこに仲間の名前や写真を見つけた時、西本さんは初めて心が軽くなり、「これまでの苦勞がむくわれて良かった!」と心から喜びを感じました。



チョコレートでできたメダルを手にとっさり

西本さんの80年前

西本さんに80年前の被爆の記憶をお聞きしました。

ピカッと光ったら真っ暗に

1945年8月6日の朝、私は4歳で、体の弱い母と家にいました。国民学校(今の小学校)3年の姉は学校へ向かう途中でした。農作業などの仕事をするために登校していたのです。突然、「B29だ!」という男の子の声がすると、ピカッとものすごい光が見えて、真っ白になったかと思うと、すぐに真っ暗になって、上からどんどん物が落ちてきました。怖くて泣き叫んでいたら、母が私に覆いかぶさって守ってくれました。



提供:「平和の子ら」委員会

ぶどう畑で3日間野宿

ぶどう畑は大やけどや大けがを負った人たちでいっぱいでした。私たちは3日3晩、ぶどう棚の下で過ごしました。食べるものがなく、お腹がすいて、まだ熱していないぶどうを食べました。熱が出て、吐いたり、下痢をしたりしました。母には青いぶどうを食べたから赤痢になりかけたんだと言われましたが、これが放射線の急性症状だったのです。



提供:「平和の子ら」委員会

今も残る放射線の影響

私の家は原爆投下の中心部から2.3kmしか離れていませんでしたが、山の陰だったので命は助かりました。父と一番上の姉、兄も原爆が落ちた日は広島にいませんでした。でも、後片付けに広島へ行ったので、放射線の影響で兄は46歳で亡くなり、父は58歳頃から次々と病気にかかり、姉は甲状腺を悪くして死ぬまで薬を飲み続けました。今も多くの被爆者がさまざまな病気に苦しんでいます。私は年を取って足が弱くなった以外は大丈夫です。でも、いつも自分や子どもたちの健康を心配しています。

西本さんからのメッセージ

みんなの力でもらったノーベル平和賞

核兵器は人類と共存できない悪魔の兵器です。私はこれまで「核兵器をなくせ」と訴え、署名活動などを続けてきました。「私が一筆書いても何も変わらないだろう」と思いながらも署名をしてくださった人たちがたくさんいるでしょう。でもそれが集まってすごい力になり、歴史を動かしたのです。私はこれからも命がある限り、伝えていきたいと思っています。5年後には証言をする人たちはほとんど残っていません。今のうちに私たちの話を聞いたり、広島に行って原爆ドームや資料館を見たり、図書館で本を読んだりしてください。むごい様子は見たくないかもしれませんが、今も世界ではあちこちで戦争をしています。私たちのような被害者を出さないために、ぜひ当時のことを知っておいてほしいと思います。



提供:「平和の子ら」委員会

川は死体でいっぱい

しばらくして外に出ると、家はめちゃくちゃ、道路は瓦礫の山でした。姉は首から血を流し、泣いて帰ってきました。母は救急袋を探して残っていた赤チンで消毒し、前から避難しようと思っていた、町外れのぶどう畑を目指して歩き始めました。

西本さんのお話を聞いて

今現在も世界で起こっている紛争が、いつか核兵器の使用につながってしまうのではないかと恐怖を感じます。このような状況だからこそ、原爆が与えた計り知れない苦しみを知り、平和を願い、核兵器のない世界を目指す大切さを改めて考える時だと感じています。後世に何か伝えていかなければいけないという被爆者の思いを知り私たちが受け取ってつないでいくことが必要だと感じました。



西本さんのお話を聞く機関紙企画検討委員

広島の高校生が描いた「原爆の絵」も展示

平和のパネル展

期間 8月1日(金)~15日(金)
場所 石川県庁19階展望ロビー
※入場無料・申込不要